View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

国立国語研究所学術情報リポジトリ

八丈語の古さと新しさ

著者	平子 達也，ペラール トマ
雑誌名	八丈方言調査報告書 ： 消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究
ページ	47-67
発行年	2013-10-30
URL	http://doi.org/10.15084/00002407

八丈語の古さと新しさ[1]

平子　達也・トマ　ペラール

１　はじめに

八丈語は，東京都八丈町（八丈島）と青ヶ島村（青ヶ島）で使用される言語である。本稿では，このうち 2012 年 9 月の合同調査（以下，本調査）で調査を行った八丈島にある 5 集落の方言のみを扱う。以下，八丈語といった場合，それは八丈島で話される諸方言の総称である。

八丈語と日本語本土諸方言および琉球諸語との関係は必ずしも明らかではない。本稿の主たる目的は，従来から指摘のあった八丈語の「古さ」と「新しさ」について今一度整理をしなおし，現代の八丈語が歴史的には複数の層が重なり合って形成されたことを示すことにある。データは主に本調査によって得られたものを用いる。

以下，表記については調査報告書や先行研究にあるものはそのまま引用し，通常「　」内に東京方言の形で（漢字仮名交じりで）その意味を記す。現段階では十分な形態素分析ができていないが，形態素境界を示す場合にはハイフンを用いる。なお，文献資料や方言のデータの出典については本稿末尾を参照。

２　先行研究[2]

八丈語と本土日本語諸方言および古代日本語（上代東国方言含む）や琉球諸語との関係に言及のある研究のうち，特に本稿に関わると考えられるものを中心にまとめておく。なお，ここにいう上代東国方言とは，『萬葉集』の巻 14 および巻 20 にある東歌・防人歌と呼ばれる歌謡に反映される当時の東日本に分布していたと考えられる言語のことである。

２．１　Dikins and Satow (1878)

八丈語の文法記述で最も古いものである。その中に，八丈語による「ウイデ祝い」の話のローマ字書きとその英訳，音声・文法の解説があるという。八丈語の形容詞連体形 -ke が『萬葉集』の東歌・防人歌にも見られるものことはその後も多くの研究者によって指摘されてているが，はじめてその事実を指摘したという点で，この Dikins and Satow の研究は評価されるべきものである。

---

[1] 本稿は，主に 2013 年 9 月 9 日に八丈町保険福祉センターで行われた国立国語研究所セミナー・第 6 回八丈方言講座『八丈・島ことば調査のつどい』（主催：国立国語研究所・八丈町教育委員会）で筆者ペラールおよび平子が行った講演内容をもとにしている。

[2] 本節の執筆にあたっては，金田(2001; 2012 など)の記述を参考にした。

２．２　北条忠雄 (1948 など)

北条 (1948)は，八丈語の動詞連体形が-o で終わることおよび既に述べた形容詞連体形-ke について，それらが上代東国方言にも見られる特徴であることを指摘した。さらにそれが単なる中央語の方言的「訛」ではなく，古形の保存であると主張した他，名詞や代名詞など上代東国方言と八丈語との関係性を積極的にとりあげる。

その後，主に上代東国方言に関する研究である北条　(1966)や，琉球語に関する歴史的考察を中心とした北条 (1977)の中で，上代東国方言と琉球諸語との比較も試みている。北条は，「上代の東国語の成立以前に八丈島方言はすでに成立していた」と推論し（北条 1948b: 88），また，上代東国方言のいくつかの特徴が「国語（筆者注：日本語本土諸方言）と琉球語とが分岐する以前の日本語の姿である」（北条 1977: 150）と考える。つまり，ここから推して測るに北条は，日本語本土諸方言と琉球諸語との共通の祖語（日琉祖語）に対立する，その姉妹言語（の末裔）として八丈語を位置付けているのである。管見の限り，北条自身は八丈語と琉球諸語との関係には直接言及していない。しかし，八丈語を日本本土諸方言および琉球諸語と対立する一言語としてとらえ，それら三者の歴史的関係について，間接的・部分的であれ自らの見解を示した最初の研究者は北条だと思われる。

いま一つ北条の主張の中で重要なのは，八丈語が単に上代東国方言に見られる形式を保存しているだけでなく，そこに中近世の中央方言の影響や八丈語固有の特徴が見られることを指摘していることである。これは服部らによって改めて強調されるところでもある。

２．３　服部四郎 (1968 など)

服部は，「八丈島方言は東歌東国方言の系統をひく非日本祖語的方言が現在の（日本祖語系の）本州東部方言の同化的影響を著しく受けつつ成立したもので，まだいくたの非日本祖語的特徴を保存している」とした（服部 1968:93）。

ここでいう「日本祖語」とは現代の近畿方言と琉球諸語との共通の祖語と概ね同じだと考えてよい。既に服部 (1959: 89)では，東国方言が日本祖語と分岐したのは，近畿方言と琉球諸語とが分岐した年代より古いという仮説を提出している。服部 (1976:26)では，その日本祖語と上代東国方言および八丈語の共通の祖語として「日本曾祖語」なるものを想定している。ただし，同じ服部 (1976: 29)では「奈良朝東国方言，同中央方言，琉球方言の三者は，日本祖語からそれぞれ別々の方向に変化発達したもの」と述べている。なお，服部は「三者が同時に分岐した確証はない」とし，三者が分かれ出た「日本祖語」には相当の年代的な幅を想定しなくてはいけない，としている。

仮に服部が考えたように上代東国方言・同中央方言・琉球諸語の三者が日本祖語からそれぞれ分岐したものだとするならば，中央方言と琉球諸語とに，八丈語や上代東国方言に見られない共通の改新が見られるはずである。しかし，服部自身はそれを示しておらず，説得力に欠ける。八丈語と琉球諸語，本土諸方言との系統的関係については，なおよく考えるべきであろう。

さて，服部は予てより「東歌・防人歌の東国方言」の残存的特徴を含む非日本祖語的特徴を現代の東日本の諸方言に見い出すことを目指してきたといい（服部 1968: 93），1967 年 7 月に八丈島樫立にて現地調査を行っている。

服部は，北条らによって既に指摘のあった形容詞連体形の語尾-ke や動詞連体形-o を，八丈語の「非日本祖語的特徴」とした。さらに，動詞の「過去の終止形」に見られる接尾辞[-(t)ara]（「行った」[ikara]，「起きた」[okitara]など）について，それが非日本祖語的特徴の残存である可能性を指摘している。この形式については，それが伝統的な方言では単純な過去ではなく結果状態を表す形式であったという指摘が金田 (2001; 2012)にある。

２．４　金田章宏

金田章宏の一連の研究によって，八丈語の記述的研究は大きく進展した。その膨大な量のテキストと記述からは八丈語と上代東国方言や中央方言との関連について多くの示唆を得ることができる。直近の研究としては，強変化動詞の過去・完了の形式（例「飲んだ」）が，ノモーからノンドーという形式に移行しているという八丈語における最近の変化を記述し，それが中央方言で上代から中古にかけて起こったノメリからノミタリという形式への移行と並行的な現象であることを指摘した金田 (2012)がある。

２．５　その他：八丈語の方言学的位置づけに関する先行研究

東條 (1934)は，八丈語を「関東方言」の「伊豆諸島方言」の一つに位置付けている。しかし，以下に見るとおり，明らかに八丈語は現代の関東方言とは大きく異なる特徴を有しており，単にその地理的位置から「関東方言」の一つとするわけにはいかない。その後，金田一 (1955)が八丈語を東日本方言の中の「東部」「北部」に対立する一方言とするという考えを示すが，これも八丈語の特異性からすれば十分ではないだろう。ただし，金田一 (1955: 215)では既に「八丈島の方言は，語頭に著しい特色を有し，特色の幾つかは，全国の他のすべての方言に対して対立する」と明言している点は注目に値する。

平山 (1958)は，八丈語を東部・西部・九州と並ぶ大区画の一つとして位置づけた。これは方言学史上大きなことで，後の金田一 (1967)や上村 (1971)などもこの方言区画に基本的に従っている。

柴田 (1961[1978])は，八丈語にあるいくつかの語彙について，それらが琉球諸語も含めた日本語のどの方言と一致するかどうかという点から，八丈語がどの方言とどの程度近いのかということを考察している。柴田は，八丈語が東部方言とよく一致する一方で，西部方言や九州方言さらには琉球諸語とも共通する性格があること，東部方言の古い層をよく保持している可能性を指摘している。全体として柴田は，平山らのように東部・西部・九州とならぶ一大方言として八丈語を位置付けることに対して慎重な姿勢を示している。

後に述べるように八丈語には古い層と新しい層が混在しており，その方言学的位置づけを明確にするのは非常に困難である。このような困難に自覚的であるにせよ，そうでないにせよ，総じ

て上記の方言学的研究は「共通の改新」を基準とした系統的な位置づけに対する考察を欠いており，方法論上の大きな問題をはらんでいると言わざるを得ない。

３　八丈語の古さ（１）　八丈語と上代日本語（東国方言含む）との比較

以下，今回の合同調査で得られたデータから，八丈語の「古さ」と「新しさ」を示す諸特徴をあげ，その史的解釈を示す。

３．１　八丈語に見られる上代東国方言の特徴の残存

既に指摘したように上代東国方言には動詞連体形 -o や形容詞連体形 -ke の例がいくつか見られる[3]。

(1)　可美都氣努 伊可抱乃祢呂尓 布路与伎能 遊吉須宜可提奴 伊毛賀伊敝乃安多里
「上毛野伊香保の嶺ろに 降ろ雪の 行き過ぎかてぬ 妹が家のあたり」（『萬葉集』 14:3423）

(2)　比登乃兒乃 可奈思家之太波 波麻渚抒里 安奈由牟古麻能 乎之家口母奈思
「人の児の 愛しけ時は 浜渚鳥 足悩む駒の 惜しけくもなし」（『萬葉集』14: 3533）

八丈語の例を本調査のデータからあげる。（　）内は当該の形式が観察された集落名。

(3)　ame-no ɸuɾo-çi-nja teɾebi bakkasi mitjaɾowa
「雨の降る日には（ばあさんは家で）テレビばかり見ている」（中之郷）

(4)　uno me no boːke iɾo no ɕiɾoke otoko-wa daɾe {dakanaː/ daɾoː}
「あの目の大きい，色の白い男は誰だろう」（末吉）

八丈語では，この動詞連体形や形容詞連体形に終助詞-wa がつき，前の連体形と融合をした形式（もしくは終助詞 ɦa のついた形式）が文末形式として用いられる（金田 2012: 124, 132）。

(5)　waɡeː-no çiʰto-wa take-de kaɡoː tsukuraɾa
「夫は竹で籠を作った」（大賀郷）

(6)　jo-joɾi niku-no hoː-ɡa takakja
「魚より肉の方が高い」（末吉）

[3] 北琉球諸語にも*-o と再建される連体形の形跡が見られることは，服部 (1976: 28-29)や Pellard (2008: 141-143)にも指摘されるところである。服部は，これを以て八丈語（東国方言），琉球諸語および中央方言の三者を「日本祖語からそれぞれ別々の方向に変化発達したもの」と考えた（服部 ibid.）。

(5)の tsukurara は注目すべき形式である。動詞「作る」tsukur-に補助動詞「あり」ar-が続いた形式の連体形として tsukuraro がある。それに終助詞-wa がつづいた形式が tsukurara で，その意味としては，現在の結果の状態を表すものである（金田 2012: 125。本稿２．３節も参照）。上代東国方言に(7)のような例があり，(5)の tsukurara(← tsukuraro-wa)もまた上代東国方言の形式を保存しているものと考えられる。

(7)　安乎楊木能 波良路[4]可波刀尓 奈乎麻都等 西美度波久末受 多知度奈良須母
「青柳の 張らろ川門に 汝を待つと 清水は汲まず 立処平すも」（『萬葉集』 14:3546）

上代東国方言との関連から言えば以下の例に見られる推量形，現代標準語「だろう」にあたる形式も注目したい。(8), (9)はいずれも「医者がくれた薬を飲めば治るだろう」という意味である。

(8)　iʃa-ga ketoː kusurjo nomeba naoru-noː-wa （三根）
(9)　isja-kara muroa͡ kuˌsurjo {nome-ba / noma-ba} naoru-nuː-wa （樫立）

金田 (2012: 131)によれば，この(naoru-)noː(-wa) [5]【三根】，(naoru-)nuː(-wa) 【樫立】という形式は，上代東国方言に見られる推量の助動詞ナムの連体形ナモに遡ると考えられるという（ *namo > nawo > nowo > nou）。以下に東歌から例をひく。

(10)　可美都氣努 乎度能多抒里我 可波治尓毛 兒良波安奈美奈毛 比等里能未思弖
「上毛野 乎度の多抒里が 川路にも 児らは逢はなも 独りのみして」（『萬葉集』14: 3405）

以上，既に先行研究によって指摘されてきたことばかりではあるが，これらのことから八丈語が東歌・防人歌に反映されている上代東国方言特有の諸特徴を保持していると言える。

---

[4] 金田 (ibid.: 125)など先行研究でも指摘されるように，この東国方言の形式に対応する上代中央方言の形式はハレル（ハレリの連体形）で，それは動詞連用形「ハリ」に補助動詞「アリ」が続いたものと考えられている。実は，上代中央方言の共時態においては，例えば《張りあり》や《咲きあり》という非融合形は実証されない。少なくとも文献上は《咲けり》（サケ甲リ）という融合形があるのみである。ただし，この所謂「リ完了形」を「動詞連用形＋アリ」とすることは，「詒」オクレリ《上上平上》・「除愈」アサレリ《上上平上》（以上『図書寮本類聚名義抄』からの例）などの平安時代資料にある声点表記から支持される（早田 1997: 42 なども参照）。

[5] 古くは三根では nou であった（金田 2001: 194 など）が，本調査のデータからは ou と oo の区別は既に失われつつあると見られる。

３．２　上代中央方言との共通点

八丈語の古さは上代東国方言との共通点（動詞連体形や形容詞連体形）から語られることが多いが，実際には上代中央方言との共通点も多くある。ここでは中央方言において中古・中世以降には見られなくなった諸現象で八丈語に残存しているものを取り上げる。

３．２．１　人称代名詞

八丈語では，一人称代名詞では ware などとともに are が用いられることがある。

(11)　ara kiː-wa isogaɕi-kja
「おれは今日は忙しい」（中之郷）

(12)　waɾja keː-wa isogaʃi-kja （大賀郷）

一人称のア系は，上代では中央方言に限らず東国方言でも散見されるが，中古以降はほとんど文献資料に例がない。『日本国語大辞典』で「アレ」を検索すると，最も新しい例が大鏡（12 世紀前半）の例である。以下には，『古事記』（712 年）から上代語の例をひく。

(13)　・・（前略）・・多和夜賀比那袁 麻迦牟登波 阿礼波須礼抒 ・・（後略）・・
「・・・手弱腕を 枕かむとは 我はすれど・・・」（『古事記』）

この一人称ア系の代名詞については，琉球諸語にも対応する代名詞が存在するという[6]。琉球諸語では例えば沖縄古語で「あん」，沖縄語今帰仁与那嶺方言　aga（「我々の」），宮古語大神方言・与那国語 anu[7]，宮古語多良間方言・伊良部方言 aN という形式が見られる。一人称ア系の代名詞は，上代語中央方言および東国方言（八丈語）そして琉球諸語が分派する以前の段階に遡ると考えられる。

八丈語の二人称代名詞には ome:（後述）などともに nare がある。金田 (2001: 71-74)によれば，nare という形式は主に口論や喧嘩の場面で用いられるが，現代ではあまり使われないという。

(14)　nare-wa jama-geː ike
「お前が畑へ行け」（大賀郷）

---

[6] 上代東国方言特有の一人称代名詞「和奴・和努」に対応する形式が琉球諸語に散見されるが（岡前 waŋ，与那国 banu など），それは上代東国方言の末裔と考えられる八丈語には未だ見いだされない。

[7] 南琉球宮古語大神方言に「俺は」が ara:という形式で現れる。基本形は anu であり，これは不規則的な形式だが，この大神方言 ara:という形式と八丈語の are / ara との関係は不明である。

nare も上代の中央・東国両方言に例がある。しかし，中央方言では中古以降急速にそれは失われたと見える。以下に『日本書紀』（720 年）と『源氏物語』（11 世紀初頭）から中央方言の例を，『萬葉集』東歌から上代東国方言の例をひく。

(15)　・・（前略）・・於夜那斯爾 奈礼奈理鶏迷夜
「・・・親無しに 汝生りけめや」（『日本書紀』推古紀 104）

(16)　恋ひわぶる 人のかたみと 手ならせば なれよ何とて なく音なるらむ（『源氏物語』若菜下）

(17)　許乃河泊尒 安佐菜安良布兒 奈礼毛安礼毛 ・・（後略）・・
「この川に 朝菜洗ふ児 汝も吾も・・・」（『萬葉集』14:3440）

八丈語の nare が口論・喧嘩の場面に多く用いられ，基本的に対等もしくは目下のものにしか使われないというのは，上代・中古における二人称代名詞ナ（レ）が対等の相手や目下のもの・動物に対して用いられていたことを引き継いでいると言えよう。しかし，上代語の「ナ」には一人称の用例もある (Whitman 1999 も参照)。また，北琉球諸語では，対応する形式が尊敬の代名詞として用いられ，南琉球では，再帰代名詞や話者指示的代名詞として用いられる。これらの「ナ（レ）」（に対応する諸形式）が，琉球語・八丈語の共通の祖語に遡るものだとして，その各語派・各方言での消長・意味変化などは興味のある問題である。

表 1　二人称の「ナ（レ）」

	二人称	再帰・話者指示
奄美（喜界島）・上嘉鉄	naːmi	
奄美（大島）・大和浜	naŋ	
奄美（加計呂麻）・諸鈍	nam	
奄美・与論	naːni	
沖縄古語	なあ	
沖縄・与那嶺	naː	
沖縄・首里	naː	
宮古・大神		naɾa
八重山・石垣		naɾa
八重山・竹富		naː(ɾə)

３．２．２　係結び

上代以降のいわゆる「古典語」における一特徴である係結びが八丈語に残存している。本調査で観察された例をあげる。

(18)　so-no hanaɕi-wa(sa) jome-ni dake-ka kikase taɾe-ɡa
「その話は妻にだけ聞かせた」（中之郷）

(19)　u-no　çito-ɡa-ka　honto꞉-no　kanemotɕi daɾe.
「あの人こそ本当の金持ちだ」（大賀郷）

(19′)　u-no　çito-ɡa　honto꞉-no　kanemotɕi daɾa.（同上）

両例とも助詞-ka に呼応して，文末の動詞が-[r]e で終わる「已然形」になっている。助詞-ka がない場合，文末の動詞は連体形＋終助詞（-ro+wa）の形式などで現れる[=19′]。この-ka は，金田 (2001: 184)などによれば，古典語の係助詞コソに遡るという。『日本書紀』歌謡から上代語の例，源氏物語から中古語の例をひく。

(20)　瀰致儞阿賦耶　嗚之慮能古　阿母儞擧曾　枳擧曳儒阿羅每
「道に闘ふや 尾代の子 母にこそ 聞こえずあらめ」（『日本書紀』雄略紀 82）

(21)　なみなみの人ならばこそあららかにもひきかなぐらめ（『源氏物語』帚木）

疑問文などで助詞-ka が現れた場合，それに呼応する形で，上代東国方言の助動詞ナムに遡る形式 -no꞉や-nu꞉が義務的に現れる（金田 2001: 195）という記述もあるが，そういった現象は本調査の範囲ではほとんど観察されなかったようである。ただし，以下の例があった。

(22)　sake꞉-wa adan ʃi-te ʦukuru-ka nare-wa ʃokan-no꞉-ʒa
「酒はどうやって作るか，お前は知っているか」（大賀郷）

金田 (2001: 195)から，助詞-ka に対して -nou で終わる典型的な例をあげておく。

(23)　dokoN-ka cjoucukaN-nou
「どこに置いただろうか」

この-ka は，前述した已然形に由来する形式を結びの形式として要求する助詞-ka とは由来が異なり，古典語における係助詞「カ」に遡ると考えられている（金田 2001: 195）。

３．２．３　その他：過去の「キ」と存在詞

本調査では，一部の話者から「(むかしよくあの人と）飲んだっけなぁ」という場合に「ノマッチガー」という言い方をすることがある，という回答を得た。これは，上代・中古における所謂過去の助動詞「キ」を用いた「ノミアリシ」に遡る形式であると考えられる（金田 2012: 126 など)。中央方言では鎌倉時代以降この「キ」は衰退し，過去を表す形式としては「-タル（<-テ＋アル)」および，その後代の変化形である「-タ」が発達する。

現代の八丈語でも，この「キ」に遡る諸形式は既にあまり使われなくなっているようで，本調査でも調査例文に対する答えとしては得られず，こちらから「「ノマッチガー」と言いますか？」というような質問をしなければ引き出せなかった。また，「飲んだとき」という意味で「ノマッチトキ」という言い方をする話者は本調査の範囲ではおらず，既に消えつつある表現だと考えられる。このことについては，上記で指摘した金田 (2012)に詳しい記述がある。

また，人や動物のような有生物の存在を「アル」で表現する。中央方言では，18 世紀以降になると次第に有生物の存在を「イル」で表すように変化していく。これもまた八丈語に残る「古さ」の一端と言えよう（金水 2006 も参照)。

４　八丈語の古さ（２）八丈語と琉球諸語との比較

北条 (1966)以来，八丈語と琉球諸語との比較というのは，間接・直接問わずまとまった形ではなされていない。現段階では未だ両言語の記述が十分でなく，比較するだけの材料がないかもしれないが，ここでは八丈語と琉球諸語との共通点を若干指摘しておきたい。

４．１　語彙

４．１．１　「一」

本土諸方言においては管見の限り「一つ」と「一人」で「一（ひと)」の部分が互いに異なる発音になることはない。しかし，八丈語では「一つ」は tetsɯ,「一人」は tori であって（三根)，接尾辞「つ」の前かそうでないかで両者の形式が異なる。琉球諸語においても八丈語と同様である（服部 1976: 30-32; 1979: 111-113. なお，Pellard 2008: 143 の Table 6 も参考になる)。

表 2　「一つ」と「つ」の前以外の「一」

	「一つ」	「一」（「つ」の前以外）
上代日本語	ヒ$_{甲}$ト$_{乙}$ツ	ヒ$_{甲}$ト$_{乙}$
中古日本語	ヒトツ（ヒテツ）	ヒト-
奄美（喜界島）・上嘉鉄	tʔi-tu	tsʔu-
奄美（大島）・大和浜	tʔɨː-tsɨ	tɛʔu-

奄美（加計呂麻）・諸鈍	tʔɨ-t	tɕʔu-
奄美（徳之島）・岡前	tʔiː-tɕi	tʔɕu-
奄美・与論	tiː-tɕi	tɕu-
沖縄古語	ふてつ	ひと
沖縄・伊江島	tʰiːtsi	tɕʰu-
沖縄・与那嶺	tʔiː-tɕi	tɕʔu-
沖縄・首里	tiː-tsi	tɕʔu-
宮古・大神	pstiː-ks	pstu-
宮古・西原	çiti-tsɨ	çitu-
八重山・石垣	pˢɨtiː-tsɨ	pˢɨtu-
琉球祖語	*pite(e)-tu	*pito-

八丈語と琉球諸語との共通の祖語の段階には，「一つ」の「一（ひと）」にあたる形式と「つ」前以外に現れるそれとでは異なる形式として再建する必要がある。その対立は本土諸方言では失われ，八丈語と琉球諸語とで保存されたのである。なお，『枕草子』（10 世紀終）に以下のような記述がある。これは，少なくとも当時の中央方言において「ひてつ」という形式は「標準的な言い方」ではなく，既に失われていたことを示唆する。

(24)　「ひてつ車に」など言ふ人もありき（枕草子 262）

４．１．２　「土・地面」

本調査では樫立で「地面」を mizʑa といい，「古い言い方」として大賀郷でも midʑa という形式を得ている。琉球語では，この mizʑa / midʑa に対応する形式が「土」を表す形式として見られ，琉球諸語と八丈語との共通の祖語の段階に*mita のような形式が再建されることが示唆される[8]。

表 3　琉球諸語の「土」

	「土」
奄美（喜界島）・上嘉鉄	mitɕa
奄美（大島）・大和浜	mitɕa

[8] なお，民間語源として「御（み）座（ざ）」がある。

奄美（加計呂麻）・諸鈍	mitɕa˙
奄美（徳之島）・岡前	ntɕaː
奄美・与論	nitɕa
伊江島	ntɕaː
沖縄・与那嶺	mitɕaː
沖縄・首里	ntɕa
宮古・大神	mta
宮古・西原	nta
八重山・石垣	nta
八重山・竹富	ntə
与那国	nta
琉球祖語	*mita

４．１．３　「蚯蚓」

本調査では「蚯蚓」を意味する形式として以下のような形式が観察された。

表 4　八丈語の「蚯蚓」

三根	大賀郷	樫立	中之郷	末吉
meme^{d}zume	meme^{d}zu(me)	nenezɯ̈me	nenedzɯme	mimizume

末吉で観察された形式は，標準語の形式に八丈語でよく使われる指小辞-me がついた形式であろう。その他の形式では，総じて第一音節と第二音節の母音が[e]になっている。管見の限り「蚯蚓」がメメズというような形式で現れる方言は本土にないようである。一方，琉球諸語ではその祖語の段階で*memezu と再建される形式が見られる[9]。

次頁の表 5 中で奄美語に見られる中舌母音 ɨ は琉球祖語の*e に由来する。また，南琉球諸語では第一・第二音節の母音が消失していない。このことから，その母音が琉球祖語の*i ではなく*e に由来すると言える。

[9] 樫立・中之郷で第一・第二音節の音節初頭子音が n になっている理由は不明。なお，江戸時代初期に出版された言葉直しを目的とする安原貞室の『片言（嘉多言）』（1650 年京都刊）には「蚯蚓をめめず」という記述が見える。

表 5　琉球諸語の「蚯蚓」

	蚯蚓
奄美（喜界島）・上嘉鉄	mimidaː
奄美（大島）・大和浜	mɨmɨdzɨ
奄美（加計呂麻）・諸鈍	mɨmɨt
奄美・与論	miːmidzi
沖縄古語	みみず
沖縄・伊江島	mimizi
沖縄・首里	mimidzi
宮古・大神	mimikɯ
八重山・石垣	mimidzɨ
与那国	dimimi
琉球祖語	*memezu

４．１．４　「魚」

「魚」を表す jo（三根・末吉・樫立・大賀郷）や ijo（中之郷）という形式は，文献上見られる「いを」に対応する。中央方言では現在「いを」に遡る言い方をしないが，琉球諸語には「いを」に対応する形式が見られる。つまり，八丈語の jo/ijo や琉球祖語の*ijo は，その共通の祖語の段階に遡る形式なのである。

表 6　琉球諸語の「魚」

	魚
奄美（喜界島）・塩道	ʔiju
奄美（大島）・大和浜	ʔjuː
奄美（加計呂麻）・諸鈍	ʔjuː
奄美（徳之島）・岡前	ʔjuː
奄美・与論	ʔjuː
沖縄古語	いゆ

沖縄・伊江島	ʔjuː
沖縄・与那嶺	ʔjuː
沖縄・首里	ʔiju
宮古・大神	ɯu
宮古・西原	zzu
八重山・石垣	idzu
八重山・竹富	idʑu
与那国	iju
琉球祖語	*ijo

この*ijo にあたる上代中央方言の確実な例はなく，上代語文献では専ら「うを」(『日本書紀』継体紀 97 「美那矢駅府紆鳴謨」 水下ふ魚も）が用いられている。その後，平安時代になって「いを」という形が多く見られるようになるが，「うを」が「いを」に取って代わられることはない。むしろ，現代の中央方言では（より一般的な「さかな」を除けば）「うお」が用いられるようになっている（「魚市場（うおいちば)」など）[10]。ただ，「いを」に対応する形式が八丈語と琉球諸語に見られるという事実からは，実際には「いを」という形式が上代以前から中央方言にもあって，たまたま文献上にないだけだと考えるべきである。

４．１．５　「朝」・「頭」

ここまでに挙げた語の他にも，八丈語と琉球諸語とで共通してみられるものの，現代の本土諸方言ではほとんど見られない語はままある。例えば「朝（特に早朝)」は，八丈語では tommetei（三根）もしくは tommete（末吉など）であるが，琉球語でも対応する形式が見られる。

表 7　琉球諸語の「朝」

	朝
奄美（徳之島）・岡前	ɕitɨmuːtɨ
沖縄古語	すとめて

[10] 岩崎本『日本書紀』推古紀（巻第二十二）に「即化ナリ少チヒサキ魚以ヲ以挟ハサマレリ樹枝」がある。このように『日本書紀』の訓などには「いを」という形式はある。しかし，これらは後代（例えば岩崎本推古紀ならば平安中期）の加点であり，上代における確例としては扱えない。『時代別国語大辞典上代編』の「いを」の項にあがっている『新撰字鏡』や『倭名類聚抄』の例も同様である。

沖縄・与那嶺	ɕitimiti
沖縄・首里	sutumiti
宮古・大神	stumuti
宮古・西原	sɨtumuti
八重山・石垣	sɨtumudi
八重山・竹富	ɕituũti
与那国	tˀumuti

「頭」にあたる八丈語 tsuburi（各方言）という形式も，琉球諸語に対応する形式が見られる一方，本土諸方言では「おつむ」などに化石的に残されているのみである。これら「朝」や「頭」などを表す諸形式はどれも八丈語と琉球諸語との共通の祖語の段階に遡り，対応する祖形が再建されうる[11]。

表 8　琉球諸語の「頭」※一部の方言では「頭蓋骨」の意

	頭
奄美（喜界島）・塩道	tˀuburaː
奄美（大島）・大和浜	tsɨburu
奄美（徳之島）・岡前	tɕiburu
奄美・与論	tɕiburu
沖縄古語	つぶる
沖縄・伊江島	siburu
沖縄・与那嶺	tɕimbu
沖縄・首里	tsiburu
八重山・石垣	tsɨburɨ
八重山・竹富	suːru

[11] また，「若い娘」を指して八丈語諸方言では menarabe，琉球語でも似たような形式が見られる。しかし，これは元々me「女」+warabe「童」という語構成であったと考えられ，八丈・琉球それぞれで独立に生じた複合語とも考えられるゆえ，ここでは八丈・琉球に残る共通の「古層」として扱わない。

４．２　u-系の指示詞

八丈語では遠称の指示詞として u-系が用いられる（ure・uno）。

(25)　uno me-no boː-ke iɾo-no ɕiɾo-ke otoko-wa daɾe {dakanaː/ daɾoː}
「あの目の大きい，色の白い男は誰だろう」（末吉）[(4)再掲]

(26)　uɾjaː noː[12] ɡakkoː dekaːɾe, jakuba-de-wa nakkjaː
「あれは（ね），学校だ。役場ではない」（末吉）

一方，琉球諸語では対応する形式が中称で使われる（表 9）。

表 9　琉球諸語に見られる u-系の指示詞・代名詞

	「それ」	「その」	「そこ」	「お前」
奄美（喜界島）・塩道	ʔuɾi		ʔuma	ʔuɾa
奄美（徳之島）・岡前	ʔuɾɨː	ʔuŋ	ʔumaː	ʔu-kkja (PL)
奄美・与論	uɾi	unu, uŋ	uma	uɾa
伊江島	ʔuɾi	ʔunu, ʔuŋ	ʔmaː	ʔɾaː
沖縄・与那嶺	ʔuɾi	ʔunu, ʔuŋ	ʔmaː	
沖縄・首里	ʔuɾi	ʔunu	ʔmma	
宮古・大神	uɾi	unu	uma	ʋʋa
宮古・西原	ui	unu	uma	vva
八重山・石垣	uɾi	unu	uma	waː
八重山・竹富	uɾi	unu, uŋ	umə, mmə	waː, woː
与那国	u	unu	uma	nda
琉球祖語	*ure	*uno	*uma	*ura

そもそも琉球諸語における指示詞の体系は必ずしも全体としては明らかになっていない。また，中央方言史上指示詞のア系の出現は中古以前には遡らない。各語派・各方言における指示詞体系

[12] この no:という形式は間投助詞の一種と見られ，談話中に非常に多く現れる。それは，前後の文節・単語と切れ目なく発音される。筆者（平子）は一度聞いただけではそれが間投助詞であるとは気づかなかった。

の詳細な記述にもとづく，史的研究が俟たれる。いずれにせよ八丈語と琉球諸語の共通の祖語の段階における指示詞の体系中に*u-系の指示詞が再建されうると言ってよい。

このu-系の指示詞に関連していえば，それと後に述べる八丈語の二人称代名詞unuとの関係も考える必要があるだろう。琉球諸語や八丈語では二人称代名詞にもu-系が見られるのだが，これはu-系指示詞が中称すなわち聞き手の領域（にあるもの）を指示することと関係している可能性もあるのである。八丈語の二人称u-についてはこの後の５．１を参照。

５　八丈語の新しさ

上記で指摘したように八丈語には古い特徴が見られる。一方で，八丈語には中央方言において中古以降に発展した新しい特徴もいくつか見られる。八丈語の歴史を考える場合，これらの史的位置づけを明らかにする必要がある。

５．１　二人称代名詞

八丈語において二人称代名詞としてnareが用いられることは既に指摘した（3.2.1）が，二人称代名詞には他にも待遇表現とかかわって多様な形式が存在している。

まず，尊敬語であり，目上の人に対して一般的に使われる（金田2001: 71）ome:もしくはomja:という形式がある。また，それらと似た形式のomiがある。omiはome: / omja:と違い，目下や同等のものに使われる。以下のomja:とomiの例は同一話者からのものである。

(27)　「お前（あなた）は畑へ行け（御行きください）」（樫立）

a)　omja:-wa jama-e odʑare-jo:（対目上）

b)　omi-wa jama-e ike（対目下）

(27a)の例ではomja:という尊敬語があるために，述語動詞も尊敬動詞odʑar-「いらっしゃる」が用いられることに注目したい。

さて，ome: / omja:は，音対応からすれば中央方言の「オマヘ（＞オマエ）」にあたる。『日本国語大辞典』に挙例がある中で，中央方言の文献資料上「オマヘ」の最古の例になるのは，『蜻蛉日記』（974年頃）にある以下の例である。しかし，これが実際「オマヘ」と読まれたかは分からない。いずれにしても「オマヘ」は中央方言では上代に遡らない。

(28)　御まへにもいとせきあへぬまでなむ，おぼしためるを，見たてまつるも，ただおしはかりたまへ　（『蜻蛉日記』中・天祿二年）

omiについては，それが同等もしくは目下のものに用いられることから，中央方言のオミ（御身）にあたる形式だと考えられる。ただし，中央方言の文献で17世紀以前にオミの用例はない。

さらに，八丈語では unu という形式も二人称代名詞として用いられる。文献資料上ウヌが中央方言で用いられるようになるのは 18 世紀頃になってからのことである。これが中称の指示詞 *u-と関連がある可能性については４．２で触れた。

(29)　uɲaː kono jo-no namee-jo ɕoke-ka.
「お前はこの魚の名前を知っているか」（末吉）

また，注目すべきは以下の omai という形式である。

(30)　omai-wa kono jo-no nameː-jo ʃoke-ka.
「お前はこの魚の名前を知っているか」（末吉。ただし(29)とは別の話者）

omai は特に同等以下のものに対して使用される形式であるという。金田(2001: 73)によれば，この omai という形式は omi や ome: / omja:に比して新しく，現代八丈語では omi や unu にとってかわろうとしているという。unu と対象がほぼ重なり，unu が失礼な言い方として敬遠された結果，中央方言の目下に対する言い方であったオマエを方言的な発音にして取り入れた形式が omai だとされている（金田 ibid.）。

通常，中央方言の ae に対しては，八丈語では方言によって異なるものの e:もしくは ja が対応する。ここで，中央方言オマエが（ome: / omja:となっておらず）omai となっているのは，既に八丈語においては尊敬語として ome: / omja:という形式があったために，同音衝突を避けて (omae >) omai として取り入れたからだという（金田 2001: 405 注 29）。なお，中央方言においてオマエが同等もしくは目下に対して使われるようになったのは，江戸時代後半（18 世紀後半以降）になってからのことである。

以下に八丈語における二人称代名詞の諸形式とそれに対応する中央方言の諸形式の歴史をまとめてみる。この二人称代名詞の様相からだけでも，現代八丈語の成立が上代語以前からの古層の継承と中世以降にあった流刑人などを通じての中央方言との接触の結果であることが示唆される。

表 10　八丈語の二人称代名詞の様相

八丈語の形式	対象（八丈語）	対応する中央方言の形式	文献に見られる時期	八丈語での成立時期（推定）
nare	同等・目下	ナ（レ）	上代語～中古語	上代以前
ome: / omja:	尊敬	オマエ	中古語以降	中世以降

unu	同等・目下	ウヌ	18 世紀以降	江戸時代以降？[13]
omi	同等・目下	オミ（？）	17 世紀以降	江戸時代以降
omai	同等・目下	オマエ（？）	18 世紀後半	近代以降？

５．２　疑問詞

疑問詞「誰」は，上代中央方言で「多例」（『日本書紀』仁徳紀 44）と語頭音節に清音を表す文字があてられていて，実際[tare]というような発音であったと考えられる。一方，八丈語では語頭音節が清音の tare という形式ではなく，濁音の dare という形式が現れる。中央方言で語頭音節が濁音となったことがはっきりと確認されるのは早くとも近世初期の資料からで，この八丈語の dare という形式も，近世以降の中央方言から取り入れられた形式だと考えられる。

(31)　uno me-no boː-ke iro-no ɕiro-ke otoko-wa dare {dakanaː/ daroː}
「あの目の大きい，色の白い男は誰だろう」（末吉）[(4)再々掲]

また，他の疑問詞「どれ」「どこ」などについても同様のことが指摘できる。すなわち，上代や中古の中央方言ではイヅレ・イヅク（もしくはイヅコ）で，ドレやドコが文献上に現れるのは 11・12 世紀からである。以下の例に見られる八丈語の「どれ」「どこ」にあたる形式も中世以降の中央方言から取り入れられたものと考えられる。

(32)　doi-ga nː-ga kasa-doː
「どれがお前の笠だ」（三根）

(33)　a-ga tega-wa {dokon/ dokodoː} aroː
「俺の鍬はどこにある」（三根）

６　八丈語の位置づけ（まとめ）

３節・４節で述べたことからは，本土諸方言（のうち，少なくとも中央方言）および琉球諸語に対立する日本語系の一言語（の末裔）として八丈語を位置付けられることが分かる。一方で，八丈語には中央方言において比較的新しく発達したと考えられる形式も散見される。５節で指摘したものがそれであり，現代の八丈語は，上代以前・日琉・八丈祖語に遡る古い特徴を残しながらも，その後本土方言の影響を強く受けて成立したものと考えられる。この言語上の事実を八丈

[13] unu については琉球諸語をも含めて比較すると，その史的位置づけについてはなお考える余地があるゆえ，ここでは「？」とした（４．２節参照）。

島の地理的・歴史的背景をも考慮に入れて解釈すれば，以下のようなシナリオを描くことができるだろう。

まず，八丈語（の基盤になった言語：先八丈語）は，本土諸方言祖語（特に中央方言系統）と琉球祖語と姉妹関係にある言語として成立したと考えられる。あるいは中央方言と琉球諸語との共通の祖語である日琉祖語と姉妹関係にあったかもしれない。少なくとも，中央方言と琉球諸語と対立する言語であったことは間違いなく，その痕跡が形容詞連体形や動詞連体形，東歌の「ナモ」に遡る推量形などの諸形式に見られる（３．１節）。

かつては，先八丈語のように中央方言とも琉球諸語とも対立する言語（東国方言）が東日本に広く行われていた。例えば長野県秋山郷の方言などでも形容詞連体形-ke や動詞連体形-o といった上代東国方言固有の特徴が見られることはこのことを示唆する（馬瀬 1980, Pellard 2008）。その後，当時京都・奈良を中心に話された中央方言の影響を強く受ける中で，東国方言は衰退していった。

現代の東日本方言の大部分では往時の東国方言の痕跡は限定的に見られるに過ぎない。例えば，動詞命令形 -ro や，上代東国語のナフに遡ると言われる打消の-nai などがそれである。しかし，八丈島や秋山郷は周辺地域から隔絶されており，中央方言の影響を受けにくい環境にあった。八丈島の場合，同じ伊豆諸島に属す三宅島など，より北に位置する有人島との間に黒潮が流れており，このため古くは本土との人・物の交流がなかった，もしくは，あったとしても限定的であったと考えられる。

その後，室町時代以降になって八丈島に当時の幕府の機関が置かれ，江戸時代以降には流刑地となる。このころには既に本土諸方言は中央方言の強い影響を受けていた。八丈語はこの中央方言によって侵食された本土方言からの影響を受けて，徐々に東国方言的特徴を失っていったものと考えられる。人称代名詞や疑問詞の在り方からすると，本土方言の八丈語への影響は非常に強く，また，かなり長く続いたのだろう。

もちろん，本土方言からの影響による変化の他にも八丈語内部での変化もあった。八丈語各方言で盛んに見られる母音融合などの音変化や，金田 (2012)に指摘されるテンス・アスペクトのシステムの変化などがそれである。

このような史的背景を経て成立したのが現代の八丈語であると考える。その史的な性格からして，八丈語は日本語史研究にとって非常に重要であるのだが，考えるべき問題は多く，その詳細な位置づけは難しい。

参考文献

上村　幸雄 (1971) 「なぜ方言を研究するか」『教育国語』 26: 27-43.
金田　章宏 (2001) 『八丈方言動詞の基礎研究』 東京：笠間書院.
金田　章宏 (2012) 「八丈方言における新たな変化と上代語」『言語研究』 142: 119-142.
金水　敏　(2006) 『日本語存在表現の歴史』 東京：ひつじ書房.

金田一春彦 (1955) 「日本語（方言）」『世界言語概説』下：212-238. 東京：研究社.

金田一春彦 (1967) 「東国方言の歴史を考える」『国語学』 69: 40-50.

柴田　武　(1961) 「東部方言の語彙（関東・東海東山）」『方言学講座』第二巻 東京：東京堂出版 [柴田 1978『方言の世界—ことばの生まれるところ』 98-123 東京：平凡社に「八丈方言の位置」として再録].

東條　操　(1934) 「関東方言」『国語科学講座 VII 本州東部の方言』 37-55. 東京：明治書院.

服部　四郎 (1959) 『日本語の系統』 東京：岩波書店.

服部　四郎 (1968) 「八丈島方言について」『ことばの宇宙』 11: 92-95.

服部　四郎 (1976) 「琉球方言と本土方言」『沖縄学の黎明—伊波普猷生誕百年記念誌』 7-55. 沖縄文化協会.

服部　四郎 (1979) 「日本祖語について 22」『言語』 8/12: 100-114. 東京：大修館書店.

早田　輝洋 (1997) 「平安時代京畿方言のアクセントに関する幾つかの問題」『音声研究』 1(2): 37-44.

平山　輝男 (1958) 「青ヶ島方言の所属」『国学院雑誌』 59: 301-306.

北条　忠雄 (1948a) 「八丈島方言の研究—特に上代性の遺存について（１）」『日本の言葉』 6: 84-88. 東京：日本の言葉研究会

北条　忠雄 (1948b) 「八丈島方言の研究—特に上代性の遺存について（２）」『日本の言葉』 7: 13-29. 東京：日本の言葉研究会

北条　忠雄 (1966) 『上代東国方言の研究』 東京：日本学術振興会

北条　忠雄 (1977) 「琉球語の諸問題—「比較言語学的立場からの考究」覚書」『秋田大学教育学部研究紀要 人文科学・社会科学』 27: 159-146.

馬瀬　良雄 (1980) 「生きている東歌の語法」『言語生活』 342: 34-40. 東京：筑摩書房.

Dikins, F and Ernest Satow (1878) `Notes of a visit to Hachijo in 1878 -Dialect.,' 『日本亜細亜協会会報』 6: 435-477.

Pellard, Thomas (2008) `Proto-Japonic *e and *o in Eastern Old Japanese.,' *Cahiers de linguistique – Asie orientale* 37(2): 133–158.

Whitman, John (1999) `Personal pronoun shift in Japanese: A case study in lexical change and point of view.,' In Kamio, Akio & Takami, Ken-ichi (eds.) *Function and Structure*. Amsterdam; Philadelphia: John Benjamins, 357-386.

用例出典

文献資料（表記は一部本稿に合わせて書き換えた部分がある）

阿部秋生・秋山虔・今井源衛（校注・訳）(1970) 『日本古典文学全集 源氏物語 一』東京: 小学館.

阿部秋生・秋山虔・今井源衛（校注・訳）(1974) 『日本古典文学全集 源氏物語 四』東京: 小学館.

白木進（編著）(1976) 『かたこと』（笠間叢書 53）東京: 笠間書院.

松浦誠一・木村正中・伊牟田経久（校注・訳）(1973) 『日本古典文学全集 土佐日記・蜻蛉日記』東京: 小学館.

松尾聰・永井和子（校注・訳）(1972) 『日本古典文学全集 枕草子』東京: 小学館.

水島義治 (1972) 『校註 萬葉集 東歌・防人歌—新増補改訂版—』 東京: 笠間書院.

荻原浅男・鴻巣隼雄（校注・訳）(1975) 『日本古典文学全集 古事記・上代歌謡』東京: 小学館.

琉球諸語（表記は簡略音声表記に統一した）

木部暢子・窪薗晴夫・下地賀代子・ローレンス ウェイン・松森晶子・竹田晃子 (2011) 『消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究ーー喜界島方言調査報告書ーー』 立川：国立国語研究所

菊千代・高橋俊三 (2005) 『与論方言辞典』東京:武蔵野書院.

国立国語研究所(編) (1963) 『沖縄語辞典』東京:大蔵省印刷局.

前新透 (2011) 『竹富方言辞典』石垣:南山舎.

宮城信勇 (2003) 『石垣方言辞典』那覇:沖縄タイムス社.

仲宗根政善 (1983) 『沖縄今帰仁方言辞典』東京:角川書店.

沖縄古語大辞典編集委員会(編) (1995) 『沖縄古語大辞典』東京:角川書店.

長田須磨・須山名保子 (1977) 『奄美方言分類辞典』東京:笠間書院.

生塩睦子 (1999) 『沖縄伊江島方言辞典』伊江村:伊江村教育委員会.2 vols.

内間直仁・新垣公弥子 (2000) 『沖縄北部・南部方言の記述的研究』東京:風間書房.

筆者の調査資料